三書再鈔　全

B 40
670

B 40
670

伊勢家相傳鞍古圖除目録

鞍　古　抄

兩白　并　記

右三書再抄

B 23475

熨斗蛇

一 三方ニ据ヘ結目客の右

一 手熨斗 三方ニ熨斗蛇を すゑ其前ニ結たる熨斗蛇を三つ許おきて貴人の前ニおく時其の結たる熨斗蛇を當人手つから取て給はるなり 是にて口説と云ふ古は無し

鷗外藏書

一祝儀の節斗蛇ハ古の手盤の心なるべし総
ハ波と云ふハ形なり

薄茶

一天目を台に据ゑて出すときは其儘飲む
又小茶椀ハ台をはづして飲むまで台に
もどして並べおく

本膳

六	四	二	本	三	五	七

又

	二	本	三
六	四	五	七

又

	二	本	三	
八	七	四	五	六

一二膳ハ客人の右三膳ハ左四ハ右五ハ左六ハ
右七ハ左にするなり　但向の膳詰まれハ本
膳二三膳の向にもするなり

一ひやしるは二膳なり

一焼物ハ小なるときは箸にて取上げむしり食ふ
へし　但はさみ上げても食ふへし

引さい

一白木の折盆ニ揃器を前ニおき亭主
引之椀の蓋ニ盛る
一色をかんなかけニする者なるが一つ物なり
へきかんなかけは折敷の足なきものなり一
つ物ニ細附（学）をしたるが引物なり

飯鉢

再進とは盛替之

一再進の飯鉢は座敷ニ置かず参らせて落
へ取入れて直して又出すべし

通盆、引物

一通盆ハ汁再進のためなり通折敷ともと
めて我方ニして引く引物ハ器を手前ニ置
きとちめなき方を我方ニして持つ

盃

一八寸ニ十文字向詰と揃帰ふ

吸物

一 三膳向の膳ニ据替ル

一 吸物持ちたる儘取上げ左の手ニ取渡し取

を合ひ候汁と吸ニ汁ハ吸せてしぬし

土器盃

一 三方ニ据て前の杯と取替ル

一 酒しみたるときは新しき土器と取替ル

一 州浜ニハひわりこめを前ニして飾まゐ

なり

膳引

一 末々ハ二三膳汁菜と本膳ニ据て其上ニ

打敷を重ねてあけさすへし又膳ハ持上

けて済すへし

茶菓子

一縁高に盛り八寸にする時本膳と同様
ふ

一菓子ハ楊枝にさし左の手に取添へし右に楊
枝を持ちたる侭食ふへし食ひ終りて
楊枝の先を折りて仕舞ふへし

濃茶

一服紗に扱う

薄茶

一其儘に如く

一平人の前にてハ大茶碗ハ右手に其儘持ち
左の手の（に）茶碗の下の方を持ち其儘にする時は
る侭飲む小茶碗ハ其儘に受取り其儘

さゝげて右の膝の前におき左に茶椀をも
ちて飲むべし　但茶椀のミ取りて飲む
もよし　貴人の前にてハ其式に取り右
の膝の前に其をおき茶椀ハ左の手をひ
ろげかゝへて持ち右の手をひろげたる手の
下に添へ両手にて持ち下座に向ひて飲む
べし　さて其のあとに茶椀を本へおくなり

式三献

一 式三献ハ初献引渡(ヒキワタシ)、二献打身(ウチミ)、三献膳(ゼン)
並(イリ)なり　膳立とも云ふ　銚子ハ片口なり　両口
ならば一方の口を包むべし　一ツ盃に三度いる
ゆ故三々九度なり　提子は出づれども加へ
にあけず

流れ

一 流れ乃は人数程の土器あり飲みたる人持ちて退くなり

召出し

一 召出しハ一人宛出でて一つ杯きこ給はるなり土器は御前にをきて退くなり 召し出さるゝを通りと云ふ

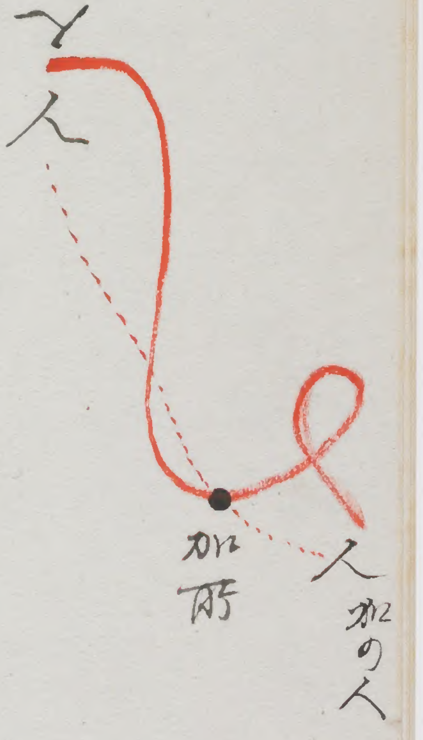
臺の杯

一 三臺の杯臺にして今の嶋臺なり 下様の人へは臺を持ち行かず給はる人側に寄りて飲むなり

降誠し

一 降誠しの酌を嫌ふ 持き付ハ酌人左の手をさいの内に突く

結酌



出陣帰陣

一 出陣には打鮑にて上の柳に三本つぐ次にかち
栗にて中の柳に三本つぐ次に昆布にて
下の柳に三本つぐなり 帰陣にはかち栗
打鮑、昆布の順なり

加へ

一 加へ致らは銚子の人先づ立ち提子の人後
に立つなり

打数

一 角(カク)の打数、平打数、そば打数の三あり
角の打数を足打ともに隅を取りたり
小さきを小角(コカク)と云ふへきかんなかけハ打

數の足なきも此なり

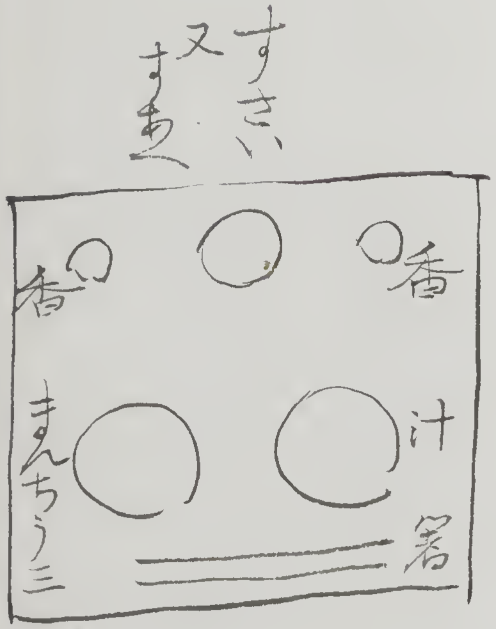
天目

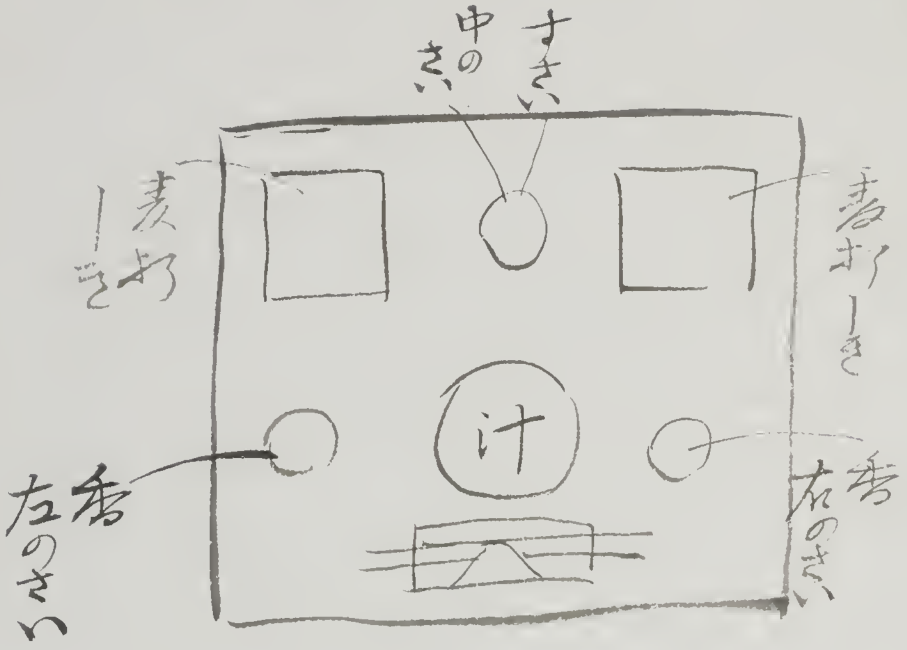
一建州やきの建山天目ハ鉄形ニして黒薬の上ニ黄色ニ雲掛かれり後ニハ常の茶椀とも云ふ

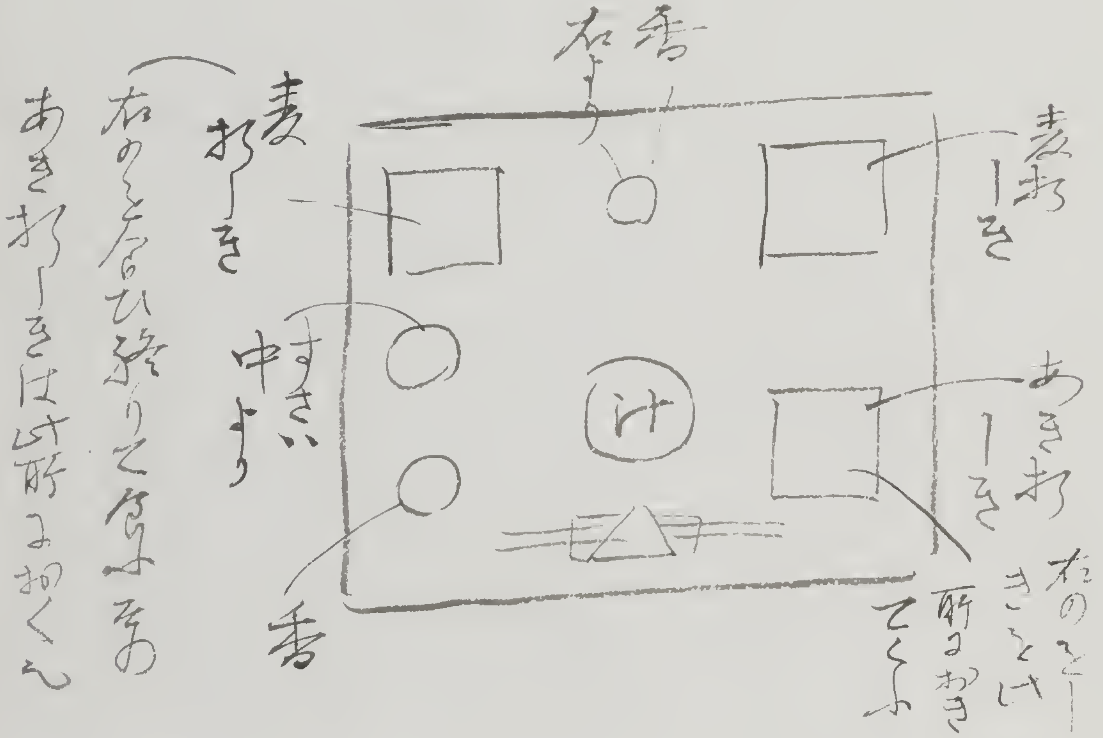
饅頭

一まうなみニ汁をそへく饅頭ハ箸ニて一つ取り右の手ニて割り左の手なるを下ニ置き右なるを左へ渡し右ニて箸を持ち食ふなり若き人ハ汁を吸はず又香等（カウトウ）を入れず香等ハ鴨頭とも書す山椒、胡椒、青柚、葱、杏仁の類なり

香又粉とも云ふ





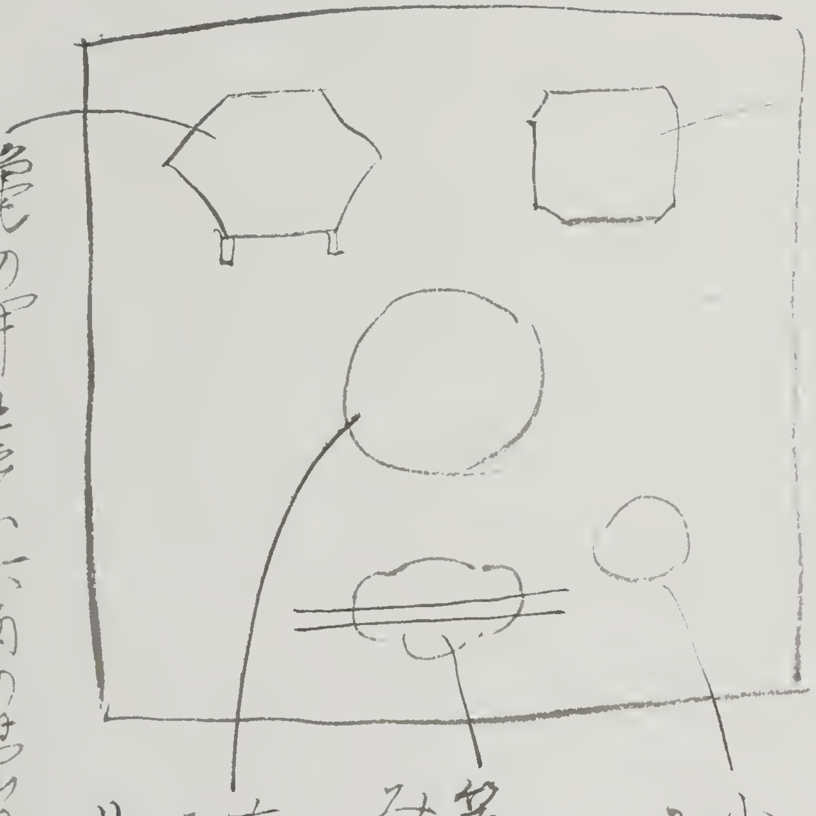


索麪

一 汁を受け中のさいを左のさいの前へ寄り
右のさいを中のさいの跡へ寄り右のさいの
跡へ索麪のあき折敷を出るなりあき
折敷は次第に重ぬへし 索麪は汁の中に
て切りて食ふへし 再進は受けて食はすと
も然るへし 香等は取らぬが然るへし

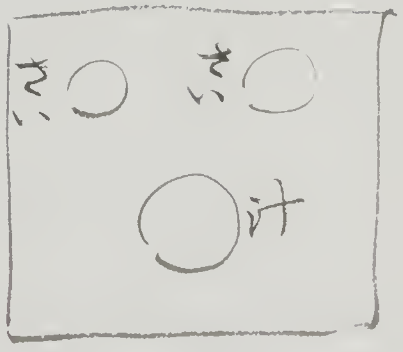
雑煮

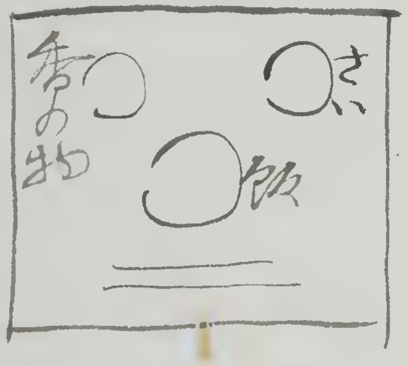
一 正しき名ハ烹雑（ハウザフ）なり 保臓ハ羽なり 太草
流は下に芋を並べ上に餅（モチヒ）を置き又其上に
上置（ウハオキ）をなす 上置ハいりこ、丸あはび、鰹
節なり 上置を食ふべし 糕ハ食はず
ともよし



湯漬

一足利義政酒後に食せしに始まる湯を更けて下におくさて飯に湯をかけて食ひ次ニ香の物を食ふそれよりいづれの菜をも食ふなり汁は老人飲むなり老人は飯を残すことなし菜のかず不定なり





飯

一 菜ハ真中の物より食ふ本膳のあへまぜなりそれより後ハ何にても食ふへし二膳の物ハ右手にて取り左の手にわたして食ふ三膳の物ハ左の手にて取る四五六七膳ハ手盡きゆゑ食はず

屏風

一 左繪を左に右繪を右に立つ左繪ハ左をうけて右に名印あり右ハ之に反す上座ハ金屏風墨繪次ハうすすみ即淡彩次の花鳥の極彩色なり

燭臺

一 足一つ上座に向くへし二つ下座に向くなり彝臺ハ足一つ正面燭臺に向くへし

一心を形るゝは燭燈を立てたる儀有るを
本式とすされと下へおろして取りても
好し
一踏し替は火を踏して持ちて出つ

扇

一浮打は蝙蝠と云ふ俗の末広又中啓なり
先しまらず沈打は先しまれる常の扇
なり古ハ宮中に持たす後男ハ檜扇蝙蝠、
女ハ細扇を持つ又扇を笏の代りに持
ち身を正すことあり笏は音骨に通ふ
仍忌ミヤクとよむなり更に降りて武家
にてハ扇を抜くことあり座にて抜き
玉 縁にて抜き又物を申す時抜くなど時
宜によるへし貴人の前にて使ふべからず

ることも勿論なり

一扇を人に出す時は要を人の方へ向くへし物は表を載せ要を我前にす人の扇と我扇との別なり

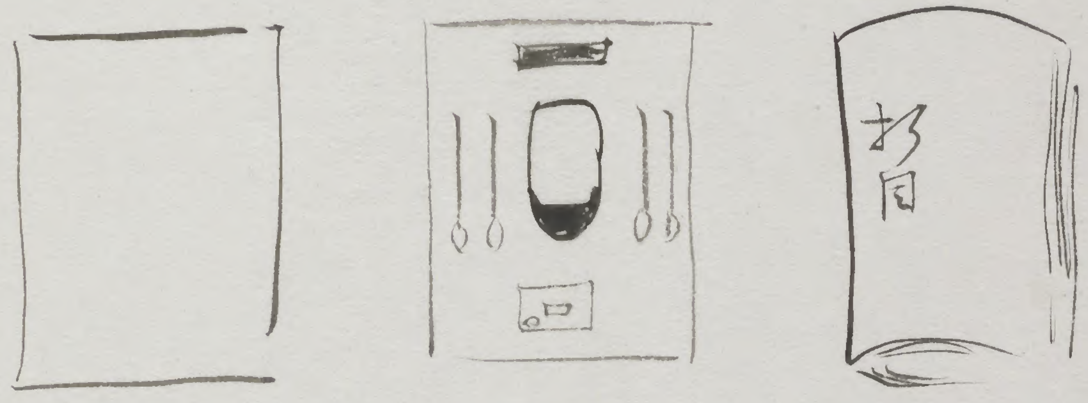
一両金の扇は平人斟酌すへし

硯料紙

一硯は我左に海を我方にし料紙は我右に折目を我左にしておくへし文書にすゑぬときは硯箱の下に料紙をおき両手にて持ち出つへし但牛王は硯箱の上にすへ硯箱の蓋は客より見て硯箱の右に俯向けて置くへし風子くは料紙の折めを我右にし切口へ硯箱を置き掛くることあり

一 墨ハ向ひて後磨る

図



弘化四年丁未十一月書

信濃松代飯嶋與作源勝休述

嘉永二己酉年神無月二十一日

澀谷庸行抜書

大正三年十二月三十日

源寅治再抄